

耳納風土記

31

びんずるそんじゃぞう
大生寺と賓頭盧尊者像

～伝承された水害の記憶～

●問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎ 75-3343

皆さんがこれを読んでいる頃は梅雨の真つ只中かと思えます。近年は福岡県内でも毎年のように豪雨災害が発生し、尊い人命が失われるなど、甚大な被害をもたらしています。今回は、災害が多発する時期だからこそ読んでいただきたい、浮羽町流川の大生寺に伝わる悲しい物語です。

大生寺は奈良時代前半に行基が道場を開いたのが始まりと伝えられています。延暦元年（782）に五台山大聖寺として勅願寺となり大いに栄えましたが、その後に衰え、明徳2年（1391）、曹洞宗として再興され、盛衰を経て慶安元年（1648）、久留米藩の支援によつて臨済宗の寺として復興しました。本堂付近の小高い場所にあるのが仏殿の「大雄宝殿」です。この建物は市指定文化財（建造物）に指定されています。本尊の薬師如来は行基菩薩の作と伝わり、貞享4年（1687）に博多の聖福寺から移築された建物です。この建物内にあるのが賓頭盧尊者像と呼ばれる木製の仏像です。この木像は日本に3体ある内の1体とされています。風格と珍しさをもつて九州各地から参詣者による多額のお賽銭をもつて仏殿が建立されたと伝わります。

そもそも賓頭盧尊者とは、お釈迦様の弟子である十六羅漢の筆頭に位置付けられます。大生寺の木像の由来は、江戸時代の溝尻村の知恵者、天地平兵衛が造つ

たという民話もありますが、詳細は定かではありません。賓頭盧尊者は病を治す神通力を持つていたとされ、地元では本尊の薬師如来と共に病氣平癒のご利益があるとして古くから信仰されている仏像です。この像には、水害にまつわる悲しい話が残されています。

享保5年（1720）の山汐の際、この木像は流失しています。その時の様子が「壊山物語」に詳細に記されています。「14歳の僧が仏具を直すために堂内に入った際、強い振動が起き、3m程の大岩が堂内に流れ込み僧の行方も像の行方も分からなくなった」と記されています。その後、14歳の僧の遺体は堂内に流れ込んだ土砂の下から無残な姿で見つかります。元々水難を逃れるために大生寺に修行に来ていたその僧の因果に住職も悲しみ、気を病みその年の9月に亡くなつてしまいます。寺の人々も住職を失い憔悴していきますが、麓の寺田にて賓頭盧尊者像が見つかったとの報せを受け、驚愕したとともに崇拝し、新客殿に賓頭盧尊者像を移した、との記録が残っています。

若い僧が豪雨によつて亡くなつてしまふという悲しい話ですが、そんな中で戻ってきた仏像を心の拠り所とし、僧の鎮魂と災害を忘れないために、当時残された人々はこの仏像に思いを託し、それが語り継がれたのでしょう。その300年以上も昔の想いを、こうして語っているということは、まさに現代の人々に届いてい



大生寺 大雄宝殿



賓頭盧尊者像

るというわけです。

近年では、歴史的な観点から災害に備えるという活動が徐々に増えてきています。私たちの先祖は、映像も音声も残せない時代に、時に石碑に、仏像に、民話に、私たちにメッセージを残してくれています。このメッセージを受け取り、災害で誰も犠牲にならないことが、先祖への恩返しであり、またこれを次世代に受け継いでいくことが現代を生きる私たちの義務ではないでしょうか。